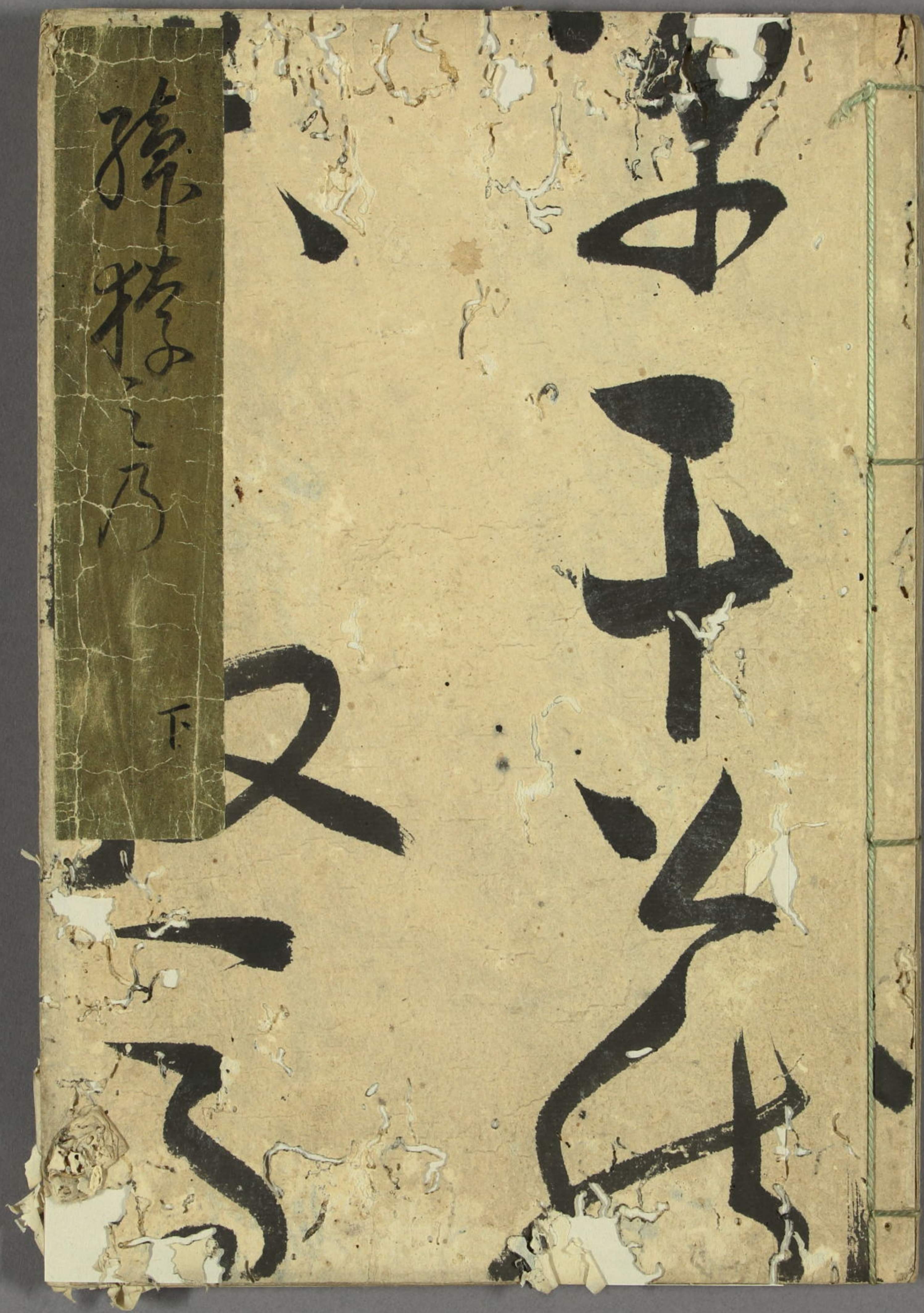


續猿蓑集卷之下

春く部

花梅

落石

温ふのありておまゐる川梅

夜時に又さす月々ゆささ

顔み似ぬる川白もあささ梅

ちり送や木の股うろたふのこ

角流人をはかすやたのふ

其角

芭蕉

洞水

又角

をぬて竹ん軒のやすき水

酒堂

貴き酒をうけりて又君
の身も酔のあきれと思ひ
つゝに

酒類はあきのききて富の花

惟然

賭うてはあきれりしづき

支考

人のきもかく窺いし川橋

治徳

ふり見やゆの中の花のふ

猿雄

七川あり花んあきぬ中か

陽和

んる新あきぬ川橋

乙州

咲花をむつゝききる老木の

木茂

あきやあきぬ川橋

治荷

二の船やさき吹ぬ川の

子珊

義虫のあきぬ川橋

魚徳

田家

菖蒲のあきぬ川橋

重重

咲かぬ花やあきぬ川橋

権首

山内は花をのしし 木の根より 一木
 なる木の根やあゝ 花の根 如雪
 花ををきて 似合世 金瓶 其角
 くれやうに 花ををき 花の根 一葉
 ぬり 花の根 花の根 泉雲
 一日を花見のあてや 只花を 沼園
 ハ里梅 花の根 花の根 全

名案

濡根や 花の根 花の根 嵐雪
 花の根 やい 花の根 曲家
 夕波の 花の根 花の根 孤屋
 一かぬの 花の根 花の根 尾顔
 花の根 花の根 花の根 芭蕉
 花の根 やい 花の根 野水

守梅のあそび業なり野老賣
 里坊は雄きくや寸先の花
 投入や梅のおもさ落のた
 病僧のなれ梅のさかす外
 おもひに思ふ家おこし梅花
 房を梅の陰あて下駄の跡
 志し梅やきく家もたふあり
 霞所や梅のみちひさみて読ん
 大丹

天中や一海は清て
 身もたふとわらや梅の離さハ
 うれし此勝のなりやせり柳
 時くそふふり川やカキ
 ちう道を教へちうや古柳
 青板のさるれくもや馬の曲
 端をうけてる紫海方極うね
 遊系
 千如
 意之
 集
 李由
 九念
 要

鳥 附魚

雪よ長りかはるゝ^{ナケニ}氷塵うきぬ

耳角

うひらや雪を塚部の風呂あり

史邦

雪にももと休めむさうめを

智月

雪や板のくくろ蘇れあへ

芭蕉

雪をもちけり雛のちるけ

玄来

まらぬや雪はくくろ雛のあへ

西堂

駒の目のさやうのくろ根に

傘下

くほるれさうり似合き白根を

長血

燕や田をたりあへ馬のあや

野重

葉の中や身をぬいておや燕

少年
峯尾

雀子や姉のくくろ雛の枝

櫻市

縄うりにちる雀乃子飼ひ

河部

り鴨やあゆまはれるの磯惜

釣糸

雪やあゆまはれるの磯惜

鮎の子れすさ海に鮎の青

土芳

かけりあや共よりくろ小鮎を

圃水

子 冊
山 鋒

五

正秀

羽 紅

猿雖

園指

車來

荒

馬

拙僊

乃龍

正秀

久可

日の新よ梅の机わに獨ほすい
浦公英やまふりそくくぬる

一桐
團扇

梅並附胡蝶

あけや月なみ哉梅の並
うよあふくめてや梅の盗喰
おもひより此里ふける所梅小

探丸
支考
己百

やありても翅を動く胡蝶形

柳梅

衣更えのきこやきこ蝶の羽
蝶の舞おつる様よくうゝゆゑ
風吹よ舞のきこる小蝶うよ
そふ舞てゐるがけき胡蝶小

惟楚
劇指
重耳
雪窓

春鹿

振おしりや廣野の鹿の角

沢雄

よき耕

め福のちちあてみささし麻

木良

苗れや笠縫をよれ宵月お
千刈り田をわたりなり難波人

桃 附椿

白桃や赤川くもるるのそ
金神をあらゝ蓋なり桃のそ
体見ふ葉枝の上の飛のそ
梅はくく中をふらふん桃のそ
花さくら桃や身兼妓の眼躍
具角

江東の事由り祖父の懐四のほろに
たのく経文題のちりうり環燈の
光のそふ事を

小服綿を光をやと務むはそに
種を枯てそふは花咲桃のそ
取あけてそふは桃のそふの光
ちりは桃のそふは花咲桃のそ

歎冬 附蹴踏藤

山吹や垣ふくふ葉一重
園坊

田舎の人の對して

ふ吹も驚ろくおれ解たまに
堀おるにけしと株や解のまに
新時や穂まゝのまゝのまに

まき月

山の端をちりちりおちるまき月

酒堂 雪堂 荊口 長崎 魯町

まき月 附 春雪蛙

おもしろい草のたよりやまきのめ
あまの調子合はるまき月れはめ
まき月や唐九あつるまき月

荊口 乃龍 醉刀

まき月 附 春雪蛙

まき月や花の川るまき月
まき月や花の川るまき月
まき月や花の川るまき月
まき月や花の川るまき月

支考 桃角 風麦 風睡

汐干

乃ち帆の清きるれぬ汐干

去来

不川又富士の影やふとない

周坊

雑春

出かたりやあふれ物なほ如帳

許六

若るやあふれ物なほ如帳

尾曜

思ふこの松のうらやわら

お芳

けうやあふれ物なほ如帳

肥

小東花にふれぬのうらや

万平

あふれに物活やあふれ

吉蘇

あふれに物活やあふれ

均水

あふれに物活やあふれ

正秀

二尺の程にふれぬのうら

仙記

川を此中よりあふれ

支原

三月

船を白濁させぬあふれ

支考

あふやふにうらふおる水

武仙

遠送るふのすゝれ立所い

百歳

雪や新雪するそでの里に

尚白

草葉のなまふつむじに

團泊

母方の段々川原や青う船

山降

あふらふを頼別をといふ
しよとをふの文もあつた

えりやあふらふのうら

千川

人もあふや境のうら

芭蕉

あふやのうらに

其角

櫛の世に

雪

あふやあふらふのうら

去来

あふに

土芳

あふやあふらふのうら

風

あふやあふらふのうら

えりやあふらふのうら

猿

一斗中より川魚類や魚をよ
 背きくおれおをんきくや花の
 葉の葉にんきく包尾の鯛の
 鯛の葉の葉をんきくや花の
 川魚や魚をんきくや花の
 枇杷の葉の葉をんきくや花の
 世の葉や葉をんきくや花の
 湯のりや大かきけのめりね

葛葉
 町子
 耕雪
 た板
 前川
 斜嶺
 山峰
 任行

えりや花をんきくや花の
 我や花をんきくや花の
 梅の葉や葉をんきくや花の
 魚のりや大かきけのめりね

竹戸
 是楽
 治圃
 圃角

るう部

新

其角

曉の電をいそぐやあゝさ

はとむるや湖水のさめ

あゝ溪や何を本懐よあゝ

蜀道鳴ぬあゝあゝ

鳴瀬のあゝやあゝあゝ

燕の居やあゝあゝあゝ

芦花

如雪

支考

曾見

おき

淀より日影回るなりけし子親

けりるる山の藤を

順れりけし

て通りたりと

郭公かきみの森や中やより

木附草花

橙や日よくりけりるるあまを

里しの空みりりぬる川あまを

園中 二句

け中の古木をいれけし桶の花

自切のき木も桶のききふし

姫百合や上よりさめけし解の糸

影山家より百合

あゝやうきききききききききき

いもえよのうきききききききき

冷けをきききききききききき

ものともえききききききききき

杜若

室嘉都

け花

千川

き龍

け花

き花

け花

け花

るる東やかき子の花を先く

拙後

いも成居のら奥

盆よりや日さすれも花並

花園

夕顔や酔てふち窓の尻

芭蕉

夕かきや裸ておきておする

嵐菊

藤の花をちりちり入江に

妙香

蘭の花に飛こし水の溜り

けし

蓮のふふやふふな水離れ

白雪

客ありきよ蓮の縄おん

良品

凡

朝露のふふれて涼凡の土

芭蕉

姫ゆきや袖入ても重く凡

至曉

ちん

藤おちる膳をぬれぬ牡丹小

田弦

子苗

京入や多羽の田植の海の中

去時 卯七

早し女は踏んでやんまの海

園指

ぬより男の植ゆれき子苗

魚日

田植奇あてきる都の海

重り

一回はくりめくりにやあのか

水枝

里の子り懸握り子苗りね

支考

螢

飯を火の烟とくちくちく

許六

く月に来るの螢を照より

野萩

納涼

涼さや竹揺りり萩はく

半残

可楽花や廣葉にあら夕涼

唯然

涼川の夜は静かに

くも残るや風なふらけ涼

史邦

涼さや萩をわての縄もく

重考

くゆーや表門明て夕涼

長崎 牡年

涼さる牛乳尾振て門の中

百手

漫真三句

腰かけて中に涼さ階子外

洒堂

涼さや標より豆をぬさる

支考

せ碑を福らさるる涼さる

雪之

さき或るを

茅屋よまのさき

涼風もあふれと登のこり外

游刀

いそが美中をぬけさる涼り形

今

立寄りく人よあきてすさる

去来

黙然とある涼さやふの上

正秀

穢人の帷子さるる久さるみ

お芳

涼さや一き羽織の風多あり

我眉

あ涼やいふのん世を月さす

里圃

盛五五

かさるや照りかき清し庭の隅

野萩

木子盛なりん世のちさきの暑り

百手

教習者のつとめやされ
はるる侍る

室の中もさき清て露冷の暑

正秀

取寄の内のあつても梅はく

乙州

煤さうり日盛あつて一處所

怒風

茨ゆへ垣もさきぬ暑う形

素洗

糸の戸も暑を月になつて

我峯

いつよりや風をさうにふれあ

平吉

積あけて暑さやあにぬる

卓家

粘りなり飽もあつさう形
立あれさすいとうらやの暑

里東

治圃

糸のさ

荀にぬるる岸のぬるな

可誠

恙竹や烟のいり庫裏の窓

曲家

五月雨附夕立

あゝ海やさうものなるに微の

不玉

さうこれや蟬がふ素乃

芭蕉

五月あや踵ふれぬ磯はる

佐圃

夕立よさし合ふり日傘

拙侯

白あや蓮の葉ふめく池の

荳蘇

夕くらやちりけく所の皮

曉鳥

中あきに傘かる家やま一所

圃水

蟬

白あや中ありにて蟬のあう

正秀

き川と来て啼てきりり蟬の

胡故

森の蟬涼におおやあつとあう

乙州

蟬啼やぬの織る窓の暑時も

曉鳥

の川を

蓮の目や瀬をあらうはせ

葉拾

雑言

空を飛つて木の動やま團なる

秋風

虫のさるる葉をわや傘は袖

荊に

る寝も祢衣の中のおもひなり

如真

川橋子

きり焼や 夢かゝる屋敷 板鏡

父鳥

異草に花うくや園の糸蘊

葛

夕園光知々也志々也酒々也

水鵝

けふもさくらも花を
 やしなひて

卷之四

魚阿少幸由阿乳落うらハ

馬覓

梅可^もや荒^あか^かぬ^ぬ日^ひの^の面^{めん}

予也

澤深や返付く海ら面のおと

聖子

儒牛はのり者のろまきうぬ

水鵝

晋の淵明を
よむ

定形より全縣の全戸を
一律

芭蕉

粘る家 惟子加ふ 少る 24

惟然

貧僧のくろしとあのをきこえ
ぬきくふすうなふにこる日の

納涼光扇一冊ありて
世に
ある

惟子乃祿乞書什錢五百

支考

錢五百

新に... 花...

花の... 花...

花の... 花...

花の... 花...

花の... 花...

花の... 花...

花の... 花...

穂部

名目

あ月に穂の... 穂...

あ月の... 穂...

あこの... 穂...

あつ... 穂...

あつ... 穂...

ふゆと園泣わ〜のふゆりやを
蘇るを夢に横たふふゆりて平田
漸くしと夢をさるるを老杜の唯を
ふゆのふゆりやを〜ふゆりやを
へ〜ふゆりやの棉を〜ふゆりやを
蘇る〜てふふゆりやを〜ふゆりやを
このふゆりやのふゆりやを〜ふゆりやを
ふゆりやを〜ふゆりやを〜ふゆりやを
ふゆりやを〜ふゆりやを〜ふゆりやを
ふゆりやを〜ふゆりやを〜ふゆりやを
ふゆりやを〜ふゆりやを〜ふゆりやを

を前に寂實をわ〜ふゆりやを
ふゆりやを〜ふゆりやを〜ふゆりやを
ふゆりやを〜ふゆりやを〜ふゆりやを
ふゆりやを〜ふゆりやを〜ふゆりやを
ふゆりやを〜ふゆりやを〜ふゆりやを
ふゆりやを〜ふゆりやを〜ふゆりやを

支考評

ふゆの海より冷る田舎の月
如月やふゆりやを〜ふゆりやを
ふゆりやを〜ふゆりやを〜ふゆりやを
ふゆりやを〜ふゆりやを〜ふゆりやを
ふゆりやを〜ふゆりやを〜ふゆりやを
ふゆりやを〜ふゆりやを〜ふゆりやを

山より北ち川にも森ぬや
 夕月や里のぬちひのまき
 場に落ちて月見なりや
 明月やあかきに女中方
 明も何もちるにぬの道
 飛入る客もよ越る月見
 後川のちより
 舟のちよけて月見
 宗比
 木枝
 利合
 丹楓
 野萩
 正秀
 文庫

待宵の月に所や空飛脚
景桃

姨捨子

月
馬
里東
杖童

園のちりやりの
月
泊園

露おきて月入あやや堀のぞき
夢うゝ月おこめぬ梢外
月新や海の青さ毛席下

涼川の末みふねとみ所よ
船をさして

川上とこの川もや月の友 芭蕉
十六あぢわ川うに園のゆか 全
つさよむハ園の旨もなりあはれ 猿蓑

セタ

ありやあ田のこのあ海の家 惟然
甲舎をらんそそて候れ朝々す 凍雲
船形のやとらしくやの船 東湖

あなをいふあう神よふふへよ 活圃
新風や薫姫の園もちら 乙洲

立秋

あなぬうや海よりあはれあ 露川
秋の川や中よ吹るや此岸 巨次
蟻 ちよ

新風のそよ透るに枯枝うね 柳梅
あにちもなぬ枯枝のそよみ 狂女

女は花のいぬ馬骨の染ひ
をこまや 鴨坂の枝のあゝれ形
一箇を花のうらや 烟る
う固とら此なれや なるうは
支濃

百合をこま芙蓉を流る余る
はよ那のなるまも 所いほまの
枯のあらまをたこ 一や鶴は花
百年
史邦
風妻

贈芭蕉氏

鶴頭や花の来る時なりあはし
鶴頭の家をたふさぬ日新ひ
折しや雨戸にさる家秋の
草花をふや 花の動く秋の風
山人の居る所をさるれ鳥う
風毎よ長く 居りり草う
杉下

朝の合からく 時花月を
里尼

あさきの遠くへてゑる橋のたもと
ふもあつたさうふきもして湯の舟
朝魚にあつたれー人や姫若帽子

虫 附鳥

さうさうに北傍に経るやうな
電馬や那は飛つてぬくろ棚
火の消て胸はさうふきもして湯の舟
秋のおやふきと軒とさうさうさ
この虫や形は似合ー月の影

園指

風麦

其角

可南

小枝

正秀

水鶴

杜若

蜻蛉や何の味あるか年の先
端頭やの腹をさやけろふの上
蓮の葉に静さうさうさうの元
めけあふさうさうさうさうの
層々にゆきさうさうさうさうの
鶴鶴やをりさうさうさうさうの
葉の種を見あふさうさうさうの
老のふきさうさうさうさうの

探丸

葛葉

赤峯

大草

馬見

永固

支考

芭蕉

秋風

秋の夜や二番たると秋の夜
雀子乃時も思ふや秋の風
何なりやわらうや秋の風
松のまふやみさうも秋の風
をのつゝ軍の志なきを思ふ
ぬんころや四つにふさふさ
あれして末と海の四方を

遊刀 式之 未考 風国 圃燕 九石 猿雖

稲妻

独りて留守とあるに稲の夜
稲妻やをよるる海のと
明ちのや稲つはるるその端
いねはまや園の方り又位の

木實 附南

園あふのふて飛りるをけ
炭焼に流柿たのい便りね

一東 字比 土音 芭蕉 為有 玄虎

秋空や日秋らるに柿のり

酒堂

はゆしやと希ともう極小

る響

と川草や塩も清く一盞

沱園

伊賀の山中は河津の
果實を待つて

松茸や秋よりさ山の形

佳然

竹葉の味は
中家とてなれり

お川草やあふぬ木の葉のる

芭蕉

楓

後屋の塀よりれり村の葉

小龍

麻

庵すぢに上りぬの麻やけのち

風騷

麻かつらよ麻やとる手鳴る

一敵

農業

起しは人を迹りてあらまの

車角

木の下に裡むさう稲穂のち

買山

さほける乃ちめくや一畛の稲

如雪

畛の身は
山家をとつて

芳妻をささぐたてりては山崎
早稲刈て落つるや小百姓
山雀のやうに啼おれの稲
ありよきに河原鶴来るや
一帯の家や草乃きんとり
肌をさし始よあしき妻の
百ちりていづるおそるかし
大河河原におもひては次と
よきもの強よきひき
そのほろやあしきおれの種

芭蕉
乃龍
斗從
支考
分
唯然
未竟
治圃

菊

菊年二百十日も恙なり
あちこちやなまの玉牡丹
菊本綿の衣に衣菊の花

葛雪
清子
支考

題五屏

可うきやわら山崎の菊の家
借りけ 花のほろやふの菊

暮秋

元峯
支考

廣泥や背 負ふて 海に秋の夢

野水

り秋を鼓するの糸の恨り形

乙州

りあきや手を起りけさるぬきの

芭蕉

雜稿

又六十海をけりて一て殺つ

之道

ふまかゝれ小家の海を松の中

團友

あゝ鶴の壁よりうたおさるる

畦止

残る故や忘れぬわが秋の雨

口な

力ぬらひに露のさるる 初外

秋子

あゝあや稲くれ家のあや

万平

柿の葉に焼くと書んて居る者

素門 宗波

な月と馬の宅に骸骨やうも

の笛鼓をうたへて能くする

あゝと書て衆生のの壁より

うさきよりあゝに生るる乃

ふつふれなまといはれあそひ

はあゝんやかの骨髄を枕

やゝゝてあゝとるつを

七

稲づゑ
うちのやうな

爲の極

冬之部

附霜

石比の垣の結月やう月時
 去る月を又松風の只をう
 けふうを人も手うれ袖時
 一時あすう月をうり新し
 馬薊 芭蕉 露沾 堅坡 小枝

平押	又み	田	も	り	付	あ	る	
柴	賣	や	い	く	あ	れ	の	米
挽	賣	も	あ	る	那	の	油	付
穴	無	の	あ	て	あ	る	池	の
あ	る	あ	や	後	あ	る	一	く
ふ	よ	あ	て	香	炉	を	あ	る
柿	包	い	日	あ	も	な	し	や
さ	る	さ	り	あ	る	れ	て	里

野明
園指
空牙
あ
鶏口
野萩
露川
里園

沖	西	の	朝	日	く	あ	る	時	あ	る
う	川	あ	れ	や	た	の	あ	り	く	風
飛	と	う	や	一	さ	ふ	し	れ	と	朝

支考
水龍
流園

元禄辛酉うめあ
 九月あき堂園うめ
 寺の宴子あき月のうめ
 けけらあきうのあき
 いあきうめあきうめ

あゝく時をきつとつふたふ
あゝく時をきつとつふたふ
あゝく時をきつとつふたふ
あゝく時をきつとつふたふ

芭蕉

葉の香や庭の地より庭の底

柚の色や起あふる葉の香

其角

葉の氣味ぬくは境や葉の

桃隣

ハ寄の香やあつあつ葉の香

法園

何魚のわき——にふん葉の枝

あふ

葉の香や庭の地より庭の底

馬寛

葉の香や庭の地より庭の底

葉の香や庭の地より庭の底

葉の香や庭の地より庭の底

葉の香や庭の地より庭の底

葉の香や庭の地より庭の底

葉の香や庭の地より庭の底

葉の香や庭の地より庭の底

葉の香や庭の地より庭の底

葉の香や庭の地より庭の底

葉の香や庭の地より庭の底

葉の香や庭の地より庭の底

うら—とぬきや作ぬきふり
重宝

草 附本

みねや疎堀に 日の透り
なほ清く咲や 夢かたの水色花
みねの花の—れや 萩原さ
唯然

范录 趙南のちり代
山家集の歌はなり

一房もくちとぬきふの氷う南
山家花をえより 同くゆり花
冬梅のちり川梅—川や鳥の
山家花も—てや 雪北家梅
亦美ふ 附冬枯風
おもひなり 亦の美ふちりや 雪の
星さえて 江の畔—い 雪あふ
み川や 亦の美ふちり 雪のり
唯然 露沾 沾徳 車廂 土芳 重宝

藤より星さつりよきおのきふ

栂風

いづれか

店をくわいて

さつり先でてさるる

一^い道

枯るる霧のしらけをこたへ

栂風

牛のひ道を枯野のまへり

柳碎

冬枯にまのまゝてゐるなほ

乃龍

草枯もく川てさるる

利牛

雪を枯てのまゝにぬる

支考

おかしやをものゝけなも

智日

風や背中あつて中へあつ

風行

本枯や川田の畔の秋^{カサケ}草も

惟然

くわい^いや東よきしらに牛乳角

塵生

夷講

あひす海酢賣み袴^{ハカマ}をきり

芭蕉

あひす海酢賣も鴨にぬる

利合

鳥 附いを

乃々の海をこて

塵浪よりぬきぬき浦島

白雲

追うけて色よりみ千々々々

草

小おちると庚申まら此あな形

お草

入海や碇の釜に鳴 千々

周折

驚にけりてぬき 鴨凡足

芭蕉

く川鴨を不追うつるけり

矢木

枚はよりひひつよは海風を

利雪

うりくや海月よりあらなる

車馬

尺く遠や子持ちのふに水

盆水

一垣より川魚や ちのう前

杉風

かくぬいや脈をたてて海霧

拙後

杜史魚や河豚の大きき水まはる
新の川よりあつるをたり

冬月 附会

里園

喰ものや門賣ありくあつ月

里圃

あゝ猫のわけやに軒やあつ月

文孝

何まも森入るまなり紙ぬすぬ

小春

ふんや門をあれき江の月あ

文孝

埋火

埋火や碁あき客のねあ

芭蕉

佛さあきあきあきあきあき

妙年
松光

自由さや月を返りあきあき

洞木

雪

ゆきや川に橋あり夕乃る

其角

朝々や月雪くすき酒の味

全

雪あゝれ心のさるをさ

夕景

鯨鰐やあきとさるをさ

祐甫

雪垣やあゝぬ人あきあき

葛原

ゆゑに子も雪をぬきや

文孝

片碁や雪降かゝるすき

圃吟

ふくしのちんや白枝のあけ
髪刺き傳ふるあけの
伊加太わさるるや雪のた

本草
陽和
配力

神樂

おゆふに薫る食あぬ家外

史邦

神ささふ

食財やうらゝけの神に
神めした千舞をさすあり
姫入の内もさるる神ささふ
狼を送り人けし神ささふ

路系
馬見
許六
伝團

煤掃 附録つよ

煤ささるや嵐追の芳楊の中
煤掃やあはれあかりさるる
たさる清のかや煤ささる

孫香
黄逸
米壺
馬見

圖如

唯然

付水

山風集

馬佛

卷六

里東

草土

車

萬年

李由

其角

正秀

萩子

猿龜

天鵝毛のさしぬさあてしものさ

惟然

演説の筆を結してやのさ

ひろき圖司呂丸の羽と信より系に
のちろとて伊勢ももあてはりぬ
はるのやのさかたなもさ

あて今をたよ
人ともなりし

盗人にあつておもあつてのさ

芭蕉

余所より帰てどんすのおぼの
ま

素芳

湖に帰所あふぬこの中

素芳

そらまよや弱りてあふ草の中

尚白

そらまよの柳をぬきあふ

柳後

裁層を束のふりし川さぬ配

山崎

一志をうりて静に除おの鶴

利合

雑多

小屏風に葉を挽くる雪さ外

鋳額

拙所より風さすし乃の端

素芳

井のあふかになるる外

素下

そまろやふ休村の長き
まろくをのりけや龍
火煙より霞あり時をおま
山陰や猿の尻振くま日向
廻板より人夫の根のまき
ふ川やまきふく郭のまき

仙杖
團仙
雲意
コ谷
治圃
杉風

釈教く部 附 追善 哀復

涅槃

涅槃像ありよき見も同
孫らん命や般子合珠の
山寺や猶守るにねる像
貧福のありとけきるや涅槃像

治圃
芭蕉
不徹
山蜂

灌佛

敬。

灌仏やほろろぬ井戸の

曲

家花や佛ふれて二三日

不玉

灌佛や釈迦と提婆を供中

久道

鬼祭

喰おもな水はー環あり

龍

藤乃々のわこーやこ錫ふ

去来

やは依や坊ふばふもふ

法圃

甲戌のな大津小治をこの

かこのこより消息されられ
を四里ふゆりて盆會をふりて

家老くなはるゝ家の墓ふ

芭蕉

俣少年 二句

うなーや麻木の葉もおとれ

佳然

その親をふりぬその子を秋の風

秋考

うはくーれ

秋はまに訪て

首の産を稲妻のさふらの甘

不意

くろくや稲妻やと桶の水

去来

はるけ

袖も柿もおろされぬり

泣園

瞬八

腸とさうりてんれを弌豆汁

許六

何のあれかのあをくろくを大師

如行

洛東の真如堂にりて
善光寺如来開帳の時

涼くもあふよる海を伝い

去来

まをすまを二むさーけり

智月

煙や家も川よりそ在せ

乙州

まふに川越河もや富まで

市橋

まふに朝の月涼

野坡

食堂に雀啼なり

支考

遠くへ行く人
 遠くへ行く人
 遠くへ行く人
 遠くへ行く人
 遠くへ行く人
 遠くへ行く人
 遠くへ行く人
 遠くへ行く人

旅と部

送別

え禄七のあそびの
あそびを送りて

妻ぬくに帰るのんせのふくね
 ありや 掃きひるうの
 河原 雅也

許六
 本勇気におもひけし

旅人のちよにの似よ推の花
 芭蕉

留別

路の惟然々宅あり

右卿の海あり

嵐やもむさしの平城より

大原

鮎の子れきく魚送るふり

芭蕉

甲斐のこのぬき宿あり

うさぎのこのにわをて

手ありて牛にきりりきりきり

木暮

編つ浦やほ世を欠るる新麻ふ

却人

あつちな〜つち〜川橋や橋の石

野徑

あめの園におもひく時

このこのさむをこそ

うけくき谷地なりけりやあま

比叟

十國子も小はぬふなりぬ秋の風

許六

大名の森戸にもゆくるおきき

全

つ海あり

る〜ちもきききりり〜ぬ盛の旗

曾良

は〜〜ちかて家なるあま〜路

猿雛

明木のき〜あ〜ち〜に〜旅路

我輩

あつたはなして砂浜のわき

史部

田圃の心ももろく伊勢の
くめいりて

父老の解ちけり秋原

大
呂九

我蒲園いづれ疎のそと

治圃

常陸の園りあひさる所は

りきうてやどりあそびに

そのあそびはまあるそと

さるいれそ一お別れの野の

下にわたり

あて

操るるは情や梅にや豆粥

支考

その山や道よりふ花もと

本

え福とこのあそびは

よりおにやあそびとて

の驛塚をふまにりて

いそ

宿かりてあそびな

くれう

續猿蓑を芭蕉翁乃一孤乃事ん
何人の撰せしむるを云ふに近江の
信伊賀とせしむる見松尾あふ
れ許あり果てしむるを云ふ
所わすのちかきと云ふ
世に廣くしむるを云ふ
或いふけしむるあり
くはるはるの事なれなり

一字はくす一切をあらたけすて
り書くとも法をいへば極り
とふもゆへ

元禄十寅

九月廿

張系平



又月名り

張系平の初稿とて一筆に書

卷

五